



小・中学生は今何をすべき？

データを扱う力を養うには

注目が高まるデータサイエンス その入り口は小学生時代に？

「近年、「データサイエンス学部」を新設する大学が多いそうですね。滋賀大学ではいち早く、2017年に開設された」と聞きました。このデータサイエンスとは、どんな学問なのですか？

奥村「大まかに言いますと、主に統計学と情報学の課題を解決しつつ、価値を創造するような学問だと思います。本学では文理融合型の



奥村太一さん。滋賀大学データサイエンス学部 准教授。2021年より現職。いじめ問題を発見するためのアンケート、学力調査など心理・教育データの収集および分析手法の開発と評価が研究テーマ。国立教育政策研究所の「学力アセスメントの在り方に関する調査研究」にも携わる

子どもが自ら身近な問題を発見し データ化してみるのが第一歩

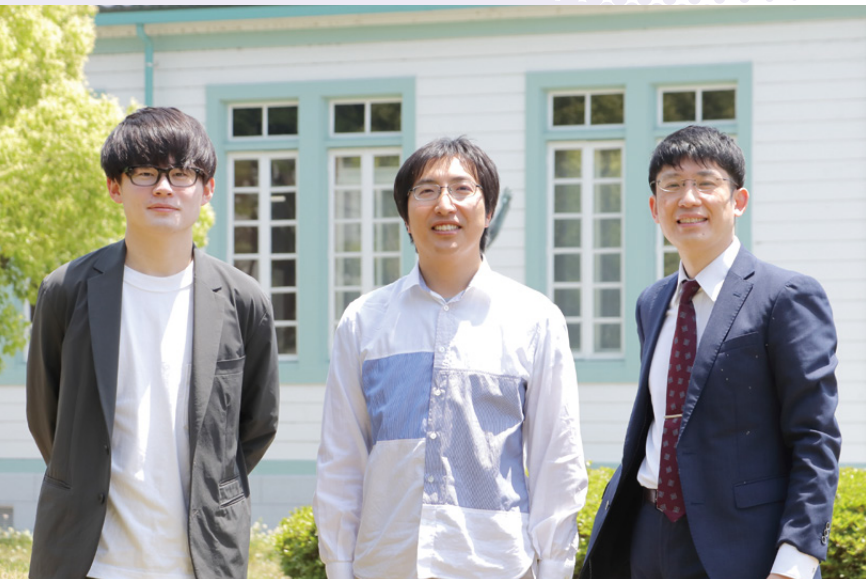
「親世代はデータ活用教育を受けておらず、何だか難しそうという印象です。小・中学生は今の時代、どんな力を育むべきでしょうか？」

奥村「まず自分のクラス、部活動、家庭など普段暮らしている社会においてどんな問題があるか、問題意識を身につける」といいます。

上野「問題意識という面では社会科などの基礎的な教養が必要です。データ分析の結果をわかりやすく人に伝えるには国語力も必要ですし、5教科をまんべんなくきちんと書くのは、と恐れる人もいますが、うまく指示しないと良い感想文は生成されませんから、本

村蒔「塾で教えていると、勉強の仕方がわからない子、学習する習慣のない子が意外と多いんです。ですので、私たちは『学び方を学ぶ』ことを大

「塾で教えるには、勉強の仕方だけでなく、内容を理解しておかない子が意外と多いんです。ですので、私たちは『学び方を学ぶ』ことを大



左から上野さん、奥村さん、村蒔さん。対話は滋賀大学、データサイエンス学部がある彦根キャンパスで。同学部に入学すると「プログラミング、数学、統計学の入門からAIを社会実装するような演習へと学びを進めます」（奥村さん）



村蒔（むらまき）亮さん。学習塾「能開センター 滋賀本部」責任者。1976年創業の学習塾「能開センター」の滋賀県4校の責任者。子どもたちの「自ら学ぶ、学習し続ける」姿勢を育むことを常に心がけているそう。講師としては主に数学・理科を担当。自らも2児の父として子育て中



和やかに話す3人。「データサイエンス学部生の就職先は？」と村蒔さんが問うと「いない業界を探すほうが難しい」と上野さん。情報通信に教育、製造、金融、小売...と幅広いそう



上野義博さん。滋賀大学大学院データサイエンス研究科。現在、金融機関のデータを使った分析に取り組む大学院生にして「近江テック・アカデミー株式会社（彦根商工会議所や彦根市、滋賀大学などで構成するコンソーシアム）」執行役員。事業の一環で子ども向けプログラミング等の教室を開催

「楽しく学び、熱心に取り組む」など さまざまな経験を子どもたちに

上野「時代の移り変わりが早いので、要らなくなっていくものは多い。中学生でやっている勉強が、いざ身につけたい知識やスキルが、後々の素地になるのでは必要になるかもしれない。データサイエンスに

奥村「『よい良い社会にしたい』という意欲を出発点にして、いろいろな学びが自分の分析の厚みになるように、データサイエンスに限らず、どんな専門分野に進むにしても最も大事なことを教えるべきです」

村蒔「学んでみて初めて、遊びや習い事も大事だけれど、何のために学ぶかです。熱心に学びながら、だんだん見えてくるものがあると思います。その中で自分の興味関心、適性がわかってくるはず。最初はあまり絞らずに幅広くいろんなことを学習して、最終的には人の役に立てることを自分の喜びにできるようにしてほしいですね」

村蒔「学んでみて初めて、遊びや習い事も大事だけれど、何のために学ぶかです。熱心に学びながら、だんだん見えてくるものがあると思います。その中で自分の興味関心、適性がわかってくるはず。最初はあまり絞らずに幅広くいろんなことを学習して、最終的には人の役に立てることを自分の喜びにできるようにしてほしいですね」